

『社会科のひろば』1964年10月（東京書籍北海道支社）

現場の課題を解決する研究集会

■生命を持った研究会を目指そう■

国立教育研究所 矢口 新

研究会のテーマには、もっともらしいものが多いようである。たとえば「学習の効率を高めるにはどうしたらよいか」などというのがある。「考えさせる社会科の学習指導はどうしたらよいか」などというのもよく見かける。これらの問題は、もしそれが本当に解決されるようなら、大へん立派な題である。けれどもでもある。大ていの場合、そういう大きなテーマに比して、いつも失望させられるのである。多分、私一人の感想ではないと思うが、いつももやもやしたものが残って、疑問だらけになる。人生においてそう問題といわれるものが簡単に、一日や二日の会合で解決するものではないということがわかっているから、それでもよいと思うけれども、何か割り切れないものが残る。どうどうめぐりをしていて、一向に発展がないという感じが強く残るのである。世の中はそんなものだと思いがらまた一方では、研究集会などやっても仕方がないという気持ちも強くなって来る。失望が重なると、次第に情熱を失ってしまう。一方ではそれをのりこえて、根気よく問題を追究するところに、やがて道が開けるのだという声もどこからか聞えて来るが、しかしそれも何となく空虚なものとしかひびかない。こうして研究集会がお座なりに流れ、形式随し、ひからびた年中行事に終ることが多い。

研究集会というものについて、われわれはある一つの具体的な観念をもっている。研究集会とはこういうものだという姿を思い浮かべることができ、それはいつの頃からか自然に成立って来たものであるといってもよい。いつ誰がどこでそういう形のものを始めたということはないが、なんとなく、大体こんなやり方をするという一種の常識とも言うべきものがある。だからそう突飛な形式もとらないようになっている。

たとえば、さきに述べたように、かなり大きなテーマが出されると、それについて誰かが意見を発表する。それを何十人かの人々が議論するというような形がとられる。何百人かの人々が寄るような集会では、全部の人々が一堂に会して議論することができないから、いくらかの分科会がもたれる。一つの分科会はせいぜい四五十人ということになる。一つの分科会の時間も、ある程度に限られる。それでも参加した人が十分に発言する機会がなくて、ただぼんやり聞いて来るという場合も多い。

これはほんの一例であるが、五人か六人位の人が一つの分科会をつくって研究するなどというようなことさえ、実際には行なわれない。そんなことは突飛なことなのである。五人か六人の分科会ということになると、何百人という人が集まるなら、何十、何百という分科会ができなくてはならない。そんなことは研究集会としてはとても成り立たないというように考えるのが常識である。そういう常識というのは、誰かが、研究集会とはかくあるべしといった所からきめられたものでなく、いつの間にか自然にそうなったというようなものである。一種の慣行である。

慣行は決して馬鹿にしてはならない。それは様々な条件、時には相反する条件を一つにまとめる役目をする。すべて存在するものは幾分かはその慣行としての意味をもつものである。おのずからそういう形に落ち着いたという意味をもっている。しかしまたそれが惰性となってしまって、いつの間にか周囲の条件からはなれて、宙に浮いた存在になってしまうことがある。われわれは慣行をその本来の意味で認めると共に、それに対して常に新しい生命を吹きこむ努力を忘れてはならない。